

北アメリカ大陸南東部先史時代の戦争の痕跡

佐々木 憲一*

キーワード

北アメリカ、先史考古学、戦争、ミシシッピ文化

目次

- I はじめに
- II 先行研究——南西部
- III 先行研究——北西海岸
- IV 南東部における戦争の痕跡
 - 1 ミシシッピ文化とは
 - 2 ミシシッピ文化における戦争を示唆する画像資料
 - 3 ミシシッピ文化における武器の副葬
 - 4 防御施設を伴うミシシッピ文化の遺跡
 - 5 北東部先史時代後期における戦争の痕跡
- V おわりに

I はじめに

本稿の目的は、北アメリカ先史時代の戦争の痕跡を紹介することである。北アメリカ大陸は非常に広大であり、自然環境が地域的に顕著に異なるために文化的・地理的に北極圏、亜北極圏、北西海岸、高原、大盆地、カリフォルニア、南西部、大平原、北東部、南東部、メソアメリカ、中央アメリカ・カリブ海沿岸地域に分けて考えることが多い(図1)。文献によっては、高原、大盆地、カリフォルニアを西部地域にまとめたり、北東部、南東部を東部森林地帯にまとめたりする。そのなかで本稿が対象とするのは南東部である。

なぜ南東部を対象とするのかにも少し関わってくるので、戦争という概念に触れておきたい。戦争の人類学をまとめたファーガソン(Ferguson 1984a: 3-5)は、マリノウスキー(Malinowski 1941)以来の戦争に関する様々な人類学的議論を紹介、検討し、戦争を次のように定義した。「相手の集団が同様の行動のために

組織化されているかどうかとは関係なく、その相手に対して、実際あるいは潜在的に殺傷力を伴い、組織化され、目的を持って行われる集団行動である」。この定義の大きなポイントは、個人的な暴力は戦争の概念には含まれておらず、「組織化され、目的を持って行われる集団行動(下線は佐々木による)」ということだろう。ということは、多様な北アメリカ大陸先史時代のなかでも、本稿の対象とするのはそれなりに組織化された社会ということになる。それは、白人入植の時期までに社会の階層化が一定程度進んだ、1960～1970年代にアメリカ合衆国人類学界で流行した新進化主義による「首長制 chiefdom」社会(日本語では佐々木 1994; 中村 1995を参照)とあってよいだろう。このような社会、それに近い社会組織が形成されていたのは、北西海岸、南西部、南東部である。

したがって、研究史では北西海岸と南西部には触れるが、本稿では社会に階層性がみられる南東部のミシシッピ Mississippian 文化(紀元11～16世紀)を特に

* 明治大学



①北極圏、②亜北極圏、③北西海岸、④高原、⑤大盆地
⑥カリフォルニア、⑦南西部、⑧大平原、⑨北東部、⑩南東部
⑪メソアメリカ、⑫中央アメリカ・カリブ海沿岸地域

図1 北アメリカ先史時代の地域区分 (著者作成)

取り上げる。というのは、日本列島の弥生、特に古墳時代研究との比較の有効性を想定するからである。中村慎一(1995)は日本の弥生文化を世界史のなかに位置づけるために、ミシシッピ文化との比較を行っており、ミシシッピ文化に焦点を当てることは意味があるだろう。またミシシッピ文化でも、古墳文化でも、車馬が導入される以前に、マウンド(墳丘墓・豪族居館の基壇・儀礼用の大規模土盛建造物)と古墳の築造に狂奔した社会によって特徴づけられるので、両者の比較は、世界史のなかでの「モニュメント」(大規模建造物)築造の意味を探るために有効と考える。

さらに本稿では、白人入植以降の白人と先住民との戦争は検討の対象から外した。というのは、戦争の考古学的証拠(地面・土中に残る痕跡)を対象とするため、痕跡が残りにくい「心理」や「戦略」「戦術」には触れられないからである。白人と先住民との戦争のこれまでの研究(例えばマクナブ 2010)では、そういった地面に残る痕跡についての言及はあまりない。戦争の痕跡としては、集落形態、殺傷人骨、武器、そして戦争・戦闘を物語る画像資料、以上4点をあげることが北アメリカの考古学界では広く受け入れられて

いる(Lambert 2002; LeBlanc 1999; Vencel 1984など)ので、本稿でもそれに従う。

II 先行研究——南西部

東部森林地帯を対象とした先史時代の戦争に関する体系的な研究は、ジョージ・マイルナー(Milner 1999)の総論以外、寡聞にして知らない。しかし、南西部と北西海岸については体系的な研究が共に1999年に活字になっているので、まず紹介しておきたい。

北アメリカ先史時代の戦争の考古学に本格的、体系的に取り組んだのは合衆国南西部のミンブレ文化を専門とするスティーブン・レブランク(LeBlanc 1999)である。南西部はプエブロ文化で有名であり、チャコ・キャニオン遺跡群、メサ・ヴェルデ遺跡群の2か所のユネスコ世界遺産を抱える地域である。19世紀後半以来の研究の蓄積があって、次の通り編年されている。バスケットメーカー Basket Maker II期(紀元1～5世紀);バスケットメーカー III期(紀元6～7世紀);プエブロ Pueblo I期(紀元8～9世紀);プエブロ II期(紀元10～11世紀);プエブロ III期(紀元12～13世紀);プエブロ IV期(紀元14～16世紀)(例えば Cordell 1997; Plog 2008)。

南西部には複数の先住民部族が居住していたので、地域文化もアナサジ Anasazi(先プエブロ Ancestral Pueblo)文化、ホホカム Hohokam 文化、マギヨン Mogollon 文化、メサ・ヴェルデ Mesa Verde(紀元1150-1300年)文化、ミンブレ Mimbres(紀元1000-1130年)文化など異なった地域文化に分かれている。またこの地域を特徴づける物質文化の1つとして、「キヴァ kiva」と呼ばれる祭祀施設がある。これは半地下で、圧倒的多数は円形であるが、方形のものもある。床には作り付けの太鼓が設置されるものもある(例えば Cordell 1997; Plog 2008)。遺跡でのキヴァは野ざらし状態であるが、現在もプエブロ族が祭祀施設として使っているキヴァは屋根で覆われている。観光客は内部を見学することはできない。

戦争・戦闘を示唆する画像として、キヴァの壁画に描かれた盾持ち人(プエブロ II期～III期前半にはない)、ミンブレ文化の土器に描かれた、首切りの画像を例としてレブランク(LeBlanc 1999: 2章)はあげている。武器と解釈できる遺物としては、ユタ州南東部で発見例が複数ある木製と角製の棍棒、使用痕がない、特に両刃の石斧、南西部では稀であるが石製のナ

イフをあげている。そのほか、武器の可能性があるものとして、剣(錐)、南西部ではユタ州の1例のみしか知られていない槍、チャマヒアス *tchamahias* と呼ばれる斧のような磨製石器をあげている。槍については、ミンブレ文化の彩文土器に、槍を持つ人の画像が知られており、武器の可能性は高いであろう。チャマヒアスは軟質の石でできているため、農具の可能性が大きい (LeBlanc 1999: 2章)。

南西部における防御集落については、存続時期の異なる3種類に分類している。1) 防御柵 *palisade* を伴う集落、2) 高地性集落、3) 崖下集落、である。防御柵を伴う集落はバスケットメーカーⅢ期に存在しており、例としてコロラド州南西部コルテス周辺のノビー・ニー Knobby Knee、パロテ・アズール *Pallote Azul*、クラウド・ブローア *Cloud Blower* 遺跡をあげている。高地性集落はバスケットメーカー期とプエブロⅠ期のみみられる。崖下集落はバスケットメーカーⅡ～Ⅲ期にみられ、その顕著な例としてアリゾナ州北部の *Canyon de Chelly* キャンオン・ドウ・シェイをあげている (LeBlanc 1999: 4章)。

これらについては議論の余地もあるのかもしれないが、通常とは違う状態の人骨は戦闘の証拠として蓋然性が極めて高い。バスケットメーカー期・プエブロⅠ期では野ざらしにされた、傷のある複数人の人骨 (LeBlanc 1999: 表4-1)、プエブロⅡ期～Ⅲ期前半では一度に多数の人間が死んだケースとバラバラにされた遺体 (LeBlanc 1999: 表5-1)、プエブロⅢ期後半～Ⅳ期では焼かれた(火葬ではなく)遺体、野ざらしにされた遺体、頭皮を剥がれた *scalping* 遺体 (LeBlanc 1999: 表6-1)、をあげている。

レブランクの大著以降、ランバート (Lambert 2002: 219-224) による総論が出されたが、基本的な枠組みはレブランクと変わらない。2012年になってスニード (Snead 2012) が *The Oxford Handbook of North American Archaeology* 所収の短文のなかで、レブランク、ランバートが指摘する戦争の痕跡に加えて、火災の被害にあった集落も戦争の痕跡としてあげている。これは自身が調査したニュー・メキシコ州北部の紀元13世紀後半から14世紀第1四半期まで営まれたバートン・コーン・プエブロ遺跡の発掘成果に基づく (Snead and Allen 2010)。この遺跡はまず高地性集落であって、防御集落と解釈可能である。遺跡は8棟の建造物、50の部屋がある建造物に囲まれた広場から成る。これらすべてが火災によって完全に破壊されていたのである。

そのほか、南西部は考古資料が極めて豊富であるため、戦争が起こったり、戦争がなくなったりする原因についての理論的な論文も近年は多い。例えばレクソン (Lekson 2002) は、予測不可能な資源 *resource unpredictability* (非常に不安定な気候など) と心理的な恐怖が社会化すること *socialization of fear* で戦争は起こると主張した。また逆に、メサ・ヴェルデ遺跡群とその周辺の考古資料を対象として、戦闘のポテンシャルがあっても紀元13世紀以降戦闘が減少する原因として、地域集団・共同体どうしの社会的紐帯の強化、プエブロ諸族の連帯の重要性、宗教の実践、商業、そして非暴力の規範への固執をコーラーら (Kohler *et al.* 2014) はあげている。

III 先行研究——北西海岸

北西海岸については、ケネス・エイムスとハーバート・マシュナー (Ames and Maschner 1999) 共著の優れた概説書があり、邦訳もされている (佐々木・設楽 2016)。そこでは戦争の章が設けられており、戦争の証拠として、3つあげている。最も明白な証拠は人骨に残された傷跡、2つ目として防御の遺跡や要塞、3つめとして武器をあげている (Ames and Maschner 1999: 8章)。

戦争の証拠が増えてくるのは前期パシフィック期 (紀元前4400～1800年) である。この時期に比定される証拠として、北西海岸中央部、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州本土のナムー *Namu* 遺跡の、紀元前2200年頃の男性人骨がある。それは、背骨に骨製尖頭器か刃器が撃ち込まれて先端部が残った状態で発見された。ナムー遺跡で確認された暴力による外傷を伴う人骨には、棍棒の打撃による頭蓋骨の陥没骨折、顔面と前歯の破碎、防御による前腕骨の「かわし」骨折、手骨の外側の防御的骨折、前腕骨と手骨の攻撃を和らげるための骨折があり、首を切られた事例もある (Ames and Maschner 1999: 209-210)。

中期パシフィック期 (紀元前1800～紀元200/500年) には、戦争の証拠が北部海岸で非常に目立つようになる。ブリティッシュ・コロンビア州北部 (北西海岸北部) のプリンス・ルパート・ハーバー *Prince Rupert Harbor* 遺跡群の埋葬人骨の30%以上が戦争などの暴力的な傷を負っていると判断された。外的傷害の高い比率は男性にあらわれているが、それには防御による前腕骨のかわし骨折や頭蓋骨の陥没骨折を含んでお

り、骨製や石製の棍棒、両端が尖った磨製石器や粘板岩でできた磨製石剣のような武器の存在が明らかである (Ames and Maschner 1999: 210)。そのほか、縛られた遺体やチュブルスキー (Cybulski 1979) が「通常と異なる unconventional」埋葬姿勢 (屈葬が主流のなかで、伸展葬) と分類した遺体が多い。

プリンス・ルパート・ハーバー遺跡群出土のこれらの遺体については、奴隷狩りではないのだが、何等かの急襲が原因で殺されたか、あるいは富の儀礼的処分の一環で奴隷として殺されたか、の2つの解釈が提示されているが、エイムスとマシュナーは、推論に過ぎないとやや冷やかな評価を下す (Ames and Maschner 1999: 190)。

後期パシフィック期 (紀元200/500~1775年) には、北西海岸北部海岸の戦争のパターンが、紀元500年頃のある段階で南部にまで広がったようで、これは埋葬人骨にも明瞭であるし、同時に防御用砦と崖の上の村の存在からも看取できる。一時的な避難所を囲う壁や溝からなる安全地帯は、北西海岸南部における後期パシフィック期の村に付随してしばしばみられる。ブリティッシュ・コロンビア州南端、バンクーバー島と本土との間のジョージア海峡 (アメリカ合衆国との国境にもなっている) 沿岸では、溝を伴う築堤遺構が広く分布している。これらの遺構の構築や維持にかなりの労働力が投入されることから、集約的で激烈な戦争が存在していた可能性を示唆する (Ames and Maschner 1999: 210-213)。

北部のプリンス・ルパート・ハーバー遺跡群出土人骨のなかでこの時期に比定されるものには、やはり戦争の証拠と解釈できるものがある。遺跡群のなかのブロードウォーク Broadwalk 遺跡では、戦利品 trophy として切断された首が2体分検出された (紀元730-1060)。頭部の保存状態は良いのだが、それに伴う胴部が発見されないのである (Cybulski 2014a)。またレチェイン Lachane 遺跡でも首を切られた人骨が3体、頭蓋骨の陥没骨折を伴うもの30体、顔面と歯の粉碎骨折17体、下顎骨折3体、前腕の骨折12体などが発掘された (Ames 2005: 89-91)。人骨を分析したチュブルスキー (Cybulski 2014b) によれば、頭蓋骨の陥没骨折は棍棒によるものであり、棍棒も3種類に区別できるという。

そのほか、チュブルスキー (Cybulski 1993) が継続的に発掘調査した、プリンス・ルパート・ハーバー遺跡群北東約100kmに位置するグリーンヴィル墓地遺

跡では39体 (内9体は女性) の人骨が検出された。そのなかには、傷が治癒したものもみられる。これらは後期パシフィック期の例であるが、中期パシフィック期の「通常と異なる」埋葬姿勢などは、単純に戦争の結果とは言えないのかもしれない。

なお、なぜ戦ったのかについては、人類学者のファーガソン (Ferguson 1984b) が、食糧獲得や交易を理由としてあげている。

IV 南東部における戦争の痕跡

1 ミシシッピ文化とは

ミシシッピ文化とは、北アメリカ大陸南東部 (ロッキー山脈以东の南部)、ミシシッピ川流域に紀元1000~1500/1600年に栄えた文化である。「ミシシッピ文化」という用語は、貝を混和材とした合衆国東部の在地土器様式を呼称するために、1903年にはじめて用いられた (Holmes 1903)。以来、この用語は、土器だけではなく、マウンド、プラザ plaza と呼ばれる広場、マウンドを伴わない大規模集落、濠や壁のような防御施設など南東部の物質文化全体を意味するようになった (Spaulding 1955)。マウンドは、恐らくエリート層の人々が埋葬された墳丘墓であったり、また首長居館や宗教施設、公的建造物の基壇であったりする。マウンドの機能については、首長がマウンド上に居を構え、一般民衆はそれを取り囲む平地に住んでいたことを、16世紀にこの地域を訪れたスペイン人デ=ソト DeSoto が記録していることに基づく。考古学的には、後述するアラバマ州マウンドヴィル遺跡のマウンドE頂上の発掘調査の結果、東西30m以上、南北18.5m、床面積555m²以上の大規模建造物が検出された。その北壁から5mのところ隣接して、13.8×15.5m、床面積214m²の建造物も発見された (Knight 2010: 5章)。その規模からして、豪族居館あるいは公的建造物と考えられる。

1960年代になって、アメリカ合衆国考古学の研究の関心が物質文化それ自体から、その背後にある社会、文化全体に移ると、ミシシッピ文化という概念は「基本的な主食を食料生産経済に依存する、南東部の社会 (Griffin 1967)」と定義されるに至る。

1978年には、アメリカ合衆国東部森林地帯 (Eastern Woodland) に紀元1000~1500/1600年頃に居住した人々の文化で、階層性を伴う社会組織をもち、南北に長大ではあるが東西に限定されたミシシッピ川の氾濫

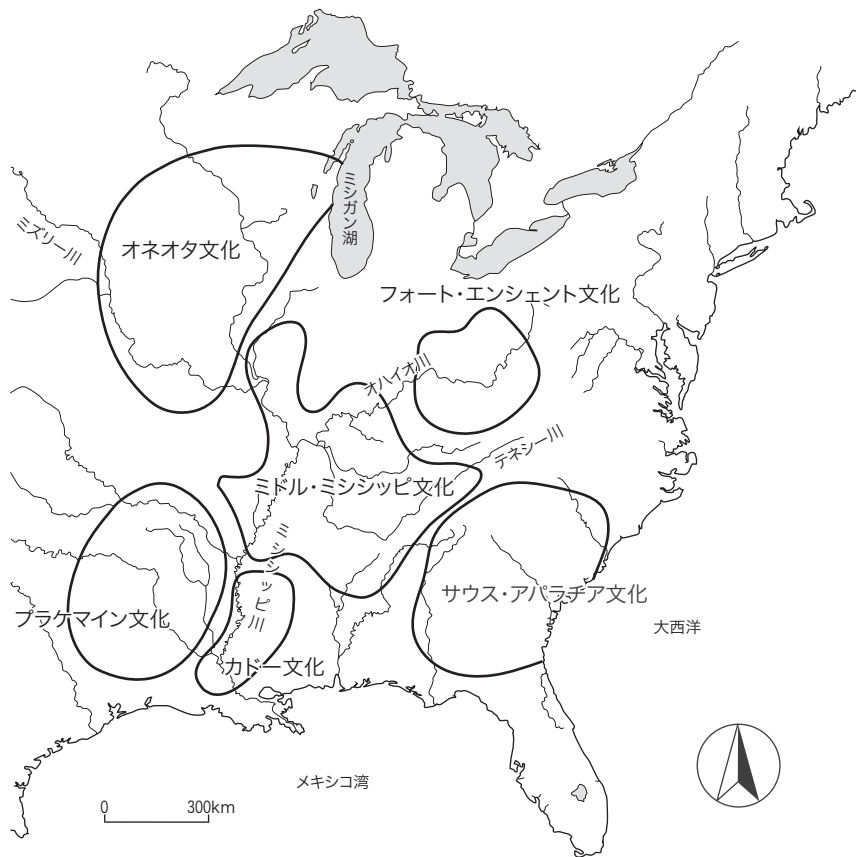


図2 ミシシッピ文化の地域文化 (Fagan 2005: 470右図をもとに著者作成)

原という特定の環境に複雑に適応した、とミシシッピ文化をスミス (Smith 1978) が定義し直した。近年では、ミシシッピ文化という概念は「首長権が中央に集中し、社会的格差が次の世代へ継承される、政治社会的組織 (Steponaitis 1983)」を指すようになった。新進化主義考古学者の言うところの首長制である。また、首長制的な社会経済構造以上に、その「宗教性」がミシシッピ文化とほかの北アメリカの先史文化とを区別するという立場もある (Knight 1986)。

ミシシッピ文化と一口に言うが、実際は以下の通り、地域文化に分かれている (図2)。北から、1) オネオタ Oneota 文化 (ミシガン湖西岸からミシシッピ川上流域をまたいでミズーリ川流域まで; 現在のウィスコンシン州、アイオワ州、ミズーリ州)、2) フォート・エンシェント Fort Ancient 文化 (五大湖南方のオハイオ川中流域——現在のオハイオ州南部——を中心とする)、3) ミドル・ミシシッピ Middle Mississippian 文化 (ミシシッピ川中流域とテネシー川流域の非常に広い地域; 現在のイリノイ州南部、ミズーリ州、ケンタッキー州、テネシー州、アラバマ州北部、ミシシッピ州北部、アーカンソー州北部)、4) サウス・アパラチア South Appalachian 文化 (大西洋

岸南部; ノース・カロライナ州、サウス・カロライナ州、ジョージア州)、5) カドー Caddoan 文化 (ミシシッピ川下流域; オクラホマ州、テキサス州北東部、ルイジアナ州西部)、6) プラケメイン Plaquemine 文化 (ミシシッピ川下流域——ミシシッピ州西部、ルイジアナ州東部——を中心とする) である (Fagan 2005)。

例えば、ミドル・ミシシッピ文化では土器を副葬する習俗があるのに、サウス・アパラチア文化では土器を副葬しない、などの違いがある。したがって、戦争の痕跡も地域文化によって異なってくる可能性が想定できる。しかし、マイルナー (Milner 1999) による合衆国東部先史時代～初期歴史時代の戦争の考古学の総論では、防御集落の時間的変遷は議論されても、地域の差異には言及がない。

前述のナイト (Knight 1986) に拠れば、ミシシッピ文化を特徴づけるイデオロギーとして、戦争への信仰、再生信仰、祖先信仰があげられるという。その3つの内本稿に關係する戦争への信仰の考古学的証拠として、戦闘用の斧 (この場合は石製と銅製)、棍棒または矛、鏃、槍投げ器のモデル、剣形製品をナイトはあげる (Knight 1986: 677)。そして、その信仰は首長



図3 テオドル・デ=ブライ Theodor de Bry (1528-1598) による当時の先住民の描写
(イエール大学 Beinecke 稀観書・文書図書館所蔵)

やエリートが抱いていたものと想定する (Knight 1986: 680)¹。

2 ミシシッピ文化における戦争を示唆する画像資料

ミシシッピ文化には戦争を示唆する資料は数多い。まず、白人が北アメリカ大陸南東部に入植した当時の画像記録がある。例えば、初期のアメリカ大陸探検の絵を多数描いた出版業者でエッチング画家のテオドル・デ=ブライ Theodor de Bry (1528-1598) による銅版画 (図3) には、弓矢やこん棒を持ち、胸飾りを身に着けるミシシッピ文化の首長 (エリート) が描かれている。

ミシシッピ文化の担い手たちが残した戦争を示唆する資料として、テネシー州ケイスタリアン・スプリングス Castalian Springs 出土の、貝製胸飾りに線刻された、右手に首、左手に斧を持つ戦士の線刻画 (直径 9.7cm) (図4)、テネシー州東部 (出土遺跡不明) 出



図4 テネシー州ケイスタリアン・スプリングス出土の、貝製胸飾りの戦士の線刻画

(国立スミソニアン研究所アメリカ・インディアン博物館コレクション [150853.000])

¹ ナイト (Knight 1986) 論文はミシシッピ文化の宗教性を議論したもので、断片的な民族史料に依拠するほか、推測が多い。戦争への信仰が首長・エリートと関係するという主張は、その信仰の根拠となる遺物が、本稿で示すように、エリートの墓と想定される墳丘墓から多く出土することに基づいていると佐々木は想定するが、この論文ではそういった記述はない。

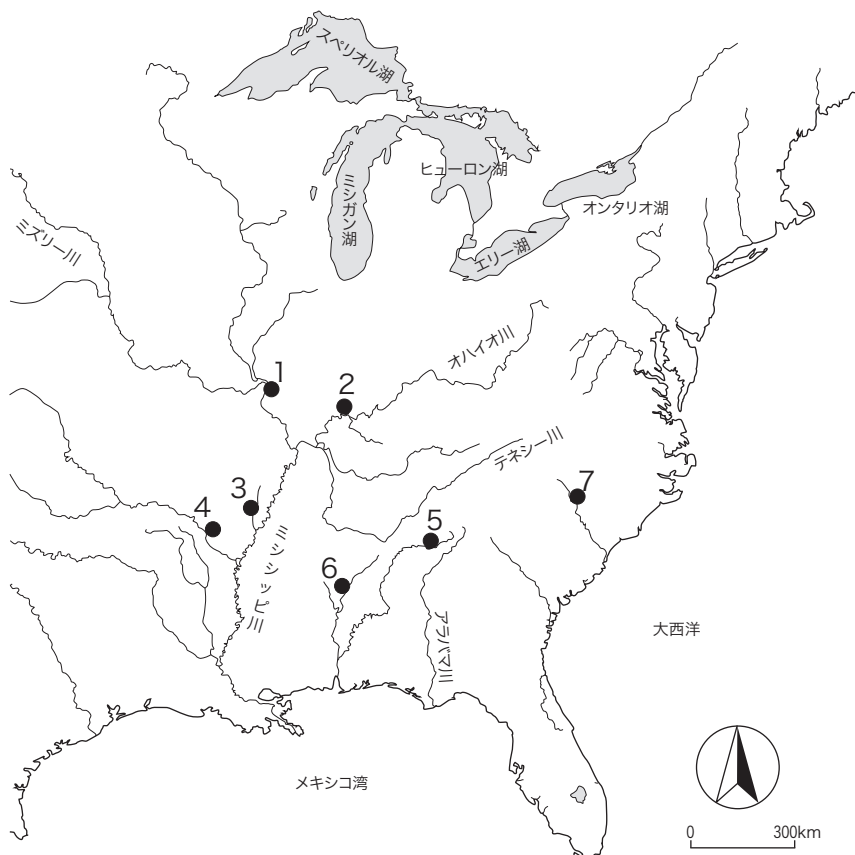
土の貝製胸飾りの2名の鳥人の戦いの線刻画(直径11.5cm; Frank H. McClug Museum コレクション)、ジョージア州エトワ Etowah 遺跡マウンドC出土の貝製胸飾りのハゲタカ戦士の線刻画がある。

3 ミシシッピ文化における武器の副葬

武器の大量副葬の例としては、石鏃451本が発見されたイリノイ州世界遺産カホキア Cahokia 遺跡(図5の1)のマウンド72(図6)の発掘成果をあげたい。遺跡は、ミシシッピ川に注ぐイリノイ川河岸の南北40km、東西17.7kmの盆地に立地する。最盛期の紀元1050~1250年の期間、その規模は1,000haに達し、そのうち、800haが居住域であった。規模、形状、機能の異なるおよそ120のマウンドが2世紀くらいの期間に築造された。ロッキー山脈以東で最大の先史時代遺跡である。遺跡最大のマックス・マウンドは最大高さ30.4m、底面での規模316×240m、6.4ha、盛土の土量614,478m³で、南北両アメリカ大陸で最大の土製建造物である。マックス・マウンドの前にはプラザ(広場)が広がっている。その広場も含めた遺跡の中央部

の80.9haは木製防御壁によって囲まれていた。また、中央部以外にも、マックス・マウンドの両側と背後に小さめのプラザ(広場)が3か所広がっていた(Iseminger 2010)。つまりプラザは4か所あったということである。

マウンド72は長軸42.7m、短軸21.9m、現状高さ1.8m(もとは3mと推定)と、カホキア遺跡で最小規模のマウンドである。これはもと存在した3基の小マウンドを1つにまとめて盛り直したもので、その東端付近(もとの小マウンド1)に埋葬された40歳代前半男性、カホキア社会の共同体のリーダーと思しき人物のために築かれたと考えられている。遺体は2万個以上のメキシコ湾産の貝製ビーズの上に横たえられており、その直下には1人の女性が埋葬され、小マウンド1には12人の人々が埋葬されていた。12人の内多数は女性、そして最低1人の子どもである(Fowler *et al.* 1999; Emerson *et al.* 2016)。主たる被葬者である男性には、451本の石鏃(というより矢)が副葬されていた。石鏃は石材ごとに整理されており、鞘に入れたと想定されている。



1:カホキア遺跡、2:エンジェル・マウンド遺跡、3:パーキン遺跡、4:トルテック・マウンド遺跡
5:エトワ遺跡、6:マウンドヴィル遺跡、7:タウン・クリーク遺跡

図5 第3、4節で言及する遺跡の位置



図6 カホキア遺跡のマウンド72



図7 マウンドヴィル遺跡マウンドC出土の銅斧

このカホキア遺跡は例外的かもしれない。ミシシッピ文化における墳丘墓は集団墓であり、1基のマウンドに埋葬する人を増やすたびに、より高く、より大きく「増築」してゆく。

またマウンドを伴わない埋葬も多い。武器が副葬された例として、アラバマ州マウンドヴィル遺跡（図5の6；紀元13～14世紀）とジョージア州エトワ遺跡（図5の5；紀元13～14世紀）があげられる。

マウンドヴィル遺跡は面積100haを超え、ロッキー山脈以東でカホキア遺跡に次ぐ第2の規模を誇る。この遺跡は同じミドル・ミシシッピ地域文化に属するが、カホキア遺跡が衰退した1250年以降、1500年まで栄えた。マウンドヴィル遺跡では32haのプラザ（広場）を取り囲むように20のマウンドが築かれた。これまでの調査で、およそ3,000の埋葬、1,000以上の完形の土器、20万以上の土器片、75の住居跡が発見されている（Peebles 1979）。20世紀初頭にクラレンス・モア（Moore 1905, 1907）によって発掘されたマウン

ドはすべて複数の埋葬を伴っていた。つまり、今のところ個人墓は確認されていない。副葬品は土器が中心で、カホキア遺跡のマウンド72に比べて貧弱である。

マウンドヴィル遺跡では、モアの発掘以前に柄と刃部が一体となった磨製石製斧が地元の農夫によって発見され、モアが所属していたフィラデルフィアのアカデミー・オブ・ナチュラル・サイエンス Academy of Natural Sciences に収蔵された。モアの発掘調査では、マウンドCから自然銅を成形した銅製斧（図7）、石製斧が発出された。これらをすべてモアは儀礼用と解釈している。また、これは明らかに儀礼用と思われるのだが、長さが45cm以上の銅製の斧がマウンドCとマウンドDから検出された。

エトワ遺跡（Moorehead 1932）はジョージア州北西部エトワ川の河岸段丘上に位置する、空堀で囲まれた22.7haの遺跡である。その堀で囲まれたなかに6基のマウンドが築かれた。その内3基は大規模で、最大のマウンドAは高さ18.6m、底部面積1.2haの規模を誇

る。2番目に大きなマウンドCは墳丘墓で、底部で一辺45.75mを測り、築造当時は墳頂部で一辺18.3m、高さ5.5mと推定されている。マウンドCは墳丘内だけではなく、その裾にも多数の土壇墓が営まれた。

エトワ遺跡の副葬品は、被葬者が衣装の一部として着用していたアクセサリと武器に大別でき、土器が副葬されることは稀であった。前者には、多種の耳飾り(木芯銅製の耳輪が主流)、線刻された貝製胸飾り、ペンダントと貝製ビーズを繋いだネックレス、前髪に垂らした木芯銅製のビーズ、ビーズを繋いだ腕輪・足環、頭飾り・髪飾り、衣服につけられたと推測される銅板・亀の甲羅・雲母、足首に通常装着したガラガラが含まれる。後者には銅製、石製、石芯銅製、柄と刃部一体の石製など多様な斧と石刃が含まれる(Larson 1971)。

マウンドCの裾の土壇墓のなかで、墓20には柄と刃部一体の石製の斧が副葬されていた。またマウンドC中腹の墓57には銅製の斧の刃部が副葬されていた(Larson 1971)。

4 防御施設を伴うミシシピ文化の遺跡

ミシシピ文化の大遺跡は防御施設を伴うものが多い。防御施設には、防御柵 palisade、環濠、堤が知られている。最も一般的なのは防御壁で、前述のカホキア遺跡²(図8)、マウンドヴィル遺跡のほか、インディアナ州エンジェル・マウンド Angel Mounds 遺跡(図5の2; 紀元13~14世紀)、ノース・カロライナ州タウン・クリーク Town Creek 遺跡(図5の7; 紀元13~14世紀)などがある(Bowne 2013)。

マウンドヴィル遺跡は、その北側がブラック=ウォ

リアー Black Warrior 川に面する崖になっており、その他の三方を防御壁で囲まれていた。その囲まれた地域は、プラザの他、居住区、「公的」施設、土器生産、その他道具の生産の場所に機能的に分割されていたようである。またマウンドXは、防御壁建造以前に築造され、防御壁築造の過程で破壊された。

エンジェル・マウンド遺跡(Black 1967)はインディアナ州南西隅のエヴァンスヴィルに位置し、オハイオ川に面している。遺跡は紀元1200年から1450年頃まで機能していた。3方を防御壁で囲まれた面積はおよそ40ha。そのなかに11基のマウンドが立地する。防御壁は全長2,225mを測り、36.6mごとに稜堡が設けられていた。防御壁は2回ないし3回建替え、あるいは修復されていたので、防御の機能は重視されていたことを示唆する。

タウン・クリーク遺跡(Coe 1995)はノース・カロライナ州中部、ピー・ディー Pee Dee 川支流のリトル Little 川に面して立地する。遺跡は紀元1150年から1450年まで機能していた。面積は2ha強と非常に小規模で、ミシシピ文化を象徴するマウンドは1基しか存在しない。遺跡の四方は防御壁で完全に囲まれており、北と南に要塞化された門があった。

防御壁は、遺跡の成長拡大に合わせて4回、外へ外へと建替えられた。現在復元されている遺跡の防御壁は高さ2.7mであるが、5回建てられた防御壁のなかでは一番小規模なものという。南北の要塞化された門のほかに、川に面する側に、防御壁にトンネルのように開けられた小さな門が2か所設けられていた。

次に環濠を伴う遺跡として、ジョージア州エトワ遺跡(紀元13~14世紀)とアーカンソー州パーキン

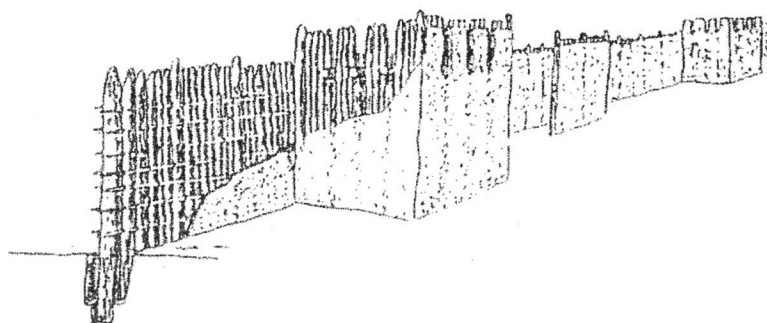


図8 カホキア遺跡の防御柵の想定復元

2 邦訳されたマクナブ『図説 アメリカ先住民 戦いの歴史』(原書房2010)では、カホキア遺跡を「カホキア砦」と表現している(p. 41)が、これは言い過ぎではないだろうか。一般書であるため仕方ない側面もあるが、アメリカ大陸最大のマンクス・マウンドなど、むしろ儀礼センターとしての役割もカホキア遺跡は担っていたと考える。またカホキア遺跡の終焉を1500年としているのも間違いである。

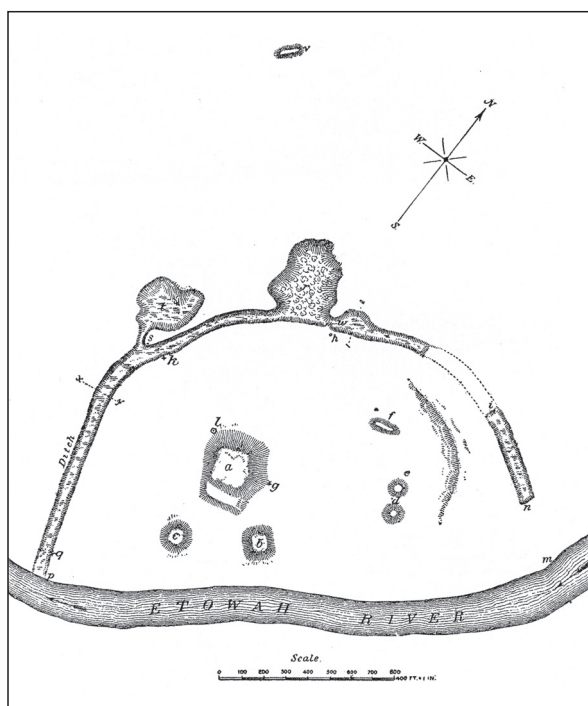


図9 環濠とエトワ川で囲まれたエトワ遺跡

Parkin 遺跡（図5の3；紀元15～16世紀）をあげる。
 エトワ遺跡（Moorehead 1932; Larson 1971）は空堀で囲まれた22.7haの遺跡である（図9）。堀（図10）は深さ3m、幅9.1mを測り、濠の2か所で、マウンド築造の土砂を確保するために掘られた土坑につながっている。堀は遺跡の三方を囲み、残りの1方向はエトワ川で区画されているため、防御用と思われる。また空堀のすぐ内側には高さ3.66mとも推定される防御壁が建てられた。防御壁は、24.4mごとに稜堡が設けられた。

パーキン遺跡（Morse 1981）はアーカンソー州北東部にある6.9haの遺跡で、紀元1350年から1650年まで

機能していた。他のミシシッピ文化のマウンドを伴う遺跡と同様、セント・フランシス川に面している。防御壁と環濠に囲まれたエリアには、高さ6.1mのパーキン・マウンドと多数の小さなマウンドがプラザ（広場）を取り囲むように築造されている。川以外の三方は、比較的浅いが非常に広い堀と防御壁で囲まれている。スペイン人がこの地域を訪れたとき、まだパーキン遺跡は集落として機能しており、そしてこの地域では戦争が頻繁に起こっていたという。

防御施設の最後の例として、堤をあげる。ミシシッピ文化のマウンド遺跡が数多いが、現時点で該当する遺跡はアーカンソー州トルテック・マウンド遺跡（図5の4；紀元8～10世紀）（Rolingson 1990, 1998）しか確認できなかった。この遺跡はミシシッピ文化創成期に栄えており、ミシシッピ文化より古いホプウェル文化（紀元前2世紀～紀元5世紀）のマウンド群が土塁で囲まれるケースが往々にしてあって、もしかしたらその伝統をひきずっていたのかもしれない。

遺跡は三日月湖に面しており、残り三方は堤と溝で囲まれている。堤と三日月湖で囲まれた40haの面積のなかに、2つのプラザ（広場）と18基のマウンドが存在した。現在残る最大のマウンド、マウンドAは14.9mの高さを誇る。規模の大きいプラザは、現在残るマウンドA、B、C、Dを入れて10基のマウンドによって囲まれており、小さいプラザは7基のマウンドによって囲まれている。マウンドBは両方のプラザの境界に位置する。これらを囲む堤と溝は長さ1.6kmに及ぶ。堤はかつて高さ2.4～3.05m、底部幅15.4mあったという。また出入口が少なくとも3か所設けられていた。防御壁の跡は確認されていない。



図10 エトワ遺跡の環濠

5 北東部先史時代後期における戦争の痕跡

ここでは、オネオタ地域文化に属する、紀元1300年頃のイリノイ州中西部ノリス・ファーム Norris Farms 36号集団墓の調査成果 (Milner *et al.* 1991) を紹介する。264体のうち、43体が先頭の痕跡を残していた。その痕跡とは、石鏃が突き刺さった骨、こん棒か斧で打たれ、陥没骨折が残る頭骨である。また14体の頭骨は頭皮が剥がされた *scalping* 痕が残っていた。11体はバラバラにされていた。なお、頭皮剥ぎは18世紀、白人入植者と先住民の間での戦闘においても、先住民戦士たちは行っていた (マクナブ 2010)。

V おわりに

以上、北アメリカ大陸南東部ミシシッピ文化の戦争・戦闘の考古学的痕跡を概観した。ミシシッピ文化と日本の弥生・古墳文化との比較は、世界史のなかでの「モニュメント」(大規模建造物) 築造の意味を探るために有効と本稿「はじめに」で述べた。例えば、弥生文化を特徴づける環濠集落の「環濠」の意味については、様々な議論がある。ミシシッピ文化では、複数のマウンドを築いた大規模集落は河岸に立地しており、残り三方を防御壁で囲むように設計された。日本では類例がないので、弥生文化における環濠集落の防御性は大きな意味はないのかもしれないが、それでも戦争という側面からも、環濠集落の意義を問い直す契機となろう。

またミシシッピ文化の大規模なマウンドは日本の古墳のような特定個人墓であるケースは極めて少ない。むしろ儀礼用、あるいは共同体用と思われるような大規模土盛建造物の方が主である (佐々木 2019)。日本の古墳が特定個人墓であるという前提には疑義を呈するつもりはないが、日本の前方後円墳の巨大性を目の当たりにして、その「公共性」「象徴性」にも、今後もっと注意を払ってもよいだろう。

日本考古学の立場からは、ミシシッピ文化のマウンド遺跡は109か所知られている (Milner 1999: 118–126) が、まだまだ課題も多いといえる。それはミシシッピ文化のなかでの地域的差異と時間的変遷である。マイルナーの総論でも、防御施設を伴う集落の時間的変遷を示すグラフ (Milner 1999: Fig. 3) でも、その数 (というより109か所うちの何パーセントか) が示されるのみである。本稿では、ミシシッピ文化創成期のトルテック・マウンド遺跡を取り上げ、堤で集落

を囲むのは、それ以前のホプウェル文化の名残ではないかとの解釈を提示した。このような、防御施設自体の時間的変遷を跡づける必要がある。

また葬送儀礼の観点からのミシシッピ文化のなかでの地域的差異にも触れたが、戦争の観点からのミシシッピ文化の地域性も今後の重要な検討課題である。ミシシッピ文化は、アメリカ考古学における国家形成過程解明のための良好なフィールドとして、研究の蓄積も膨大である。しかし、ナイト (Knight 1986) の論文のように、仮説重視で根拠が不十分な研究が多いという印象がある。編年と地域性を重視する日本考古学の方法論を導入することで、ミシシッピ文化理解のために大きく貢献できることを主張して擲筆したい。

参考文献

(日本語文献)

- エイムス、ケネス・M、ハーバート・D. G. マシュナー
2016 『複雑狩猟民とはなにか——アメリカ北西海岸の先史考古学』佐々木憲一 (監訳)・設楽博己 (訳) 雄山閣 (Ames, Kenneth M. and Herbert D. G. Maschner 1999 *Peoples of the Northwest Coast: Their Archaeology and Prehistory*. London: Thames & Hudson.)。
- 佐々木 憲一
1994 「北アメリカ——考古学事情」田中琢 (編) 『最新海外考古学事情——月刊文化財発掘出土情報 [増刊号]』pp. 19–24、ジャパン通信社。
2019 「北アメリカのマウンド」福永伸哉 (編) 『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』(科研報告書)、pp. 127–154、大阪大学大学院文学研究科考古学研究室。

中村 慎一

- 1995 「世界史のなかの弥生文化」古代オリエント博物館 (編) 『文明学原論—江上波夫先生米寿記念論集—』pp. 381–400、山川出版社。

マクナブ、クリス

- 2010 『図説 アメリカ先住民 戦いの歴史』増井志津代 (監訳)・角敦子 (訳)、原書房 (McNab, Chris 2010 *The Native American Warrior, 1500–1890 CE*. London: Amber Books.)。

(外国語文献)

Ames, Kenneth M.

- 2005 *The North Coast Prehistory Project Excavations in Prince Rupert Harbour, British Columbia: The Artifacts*. (British Archaeological Reports (BAR) International Series 1342). Oxford: John and Erica Hedges.

- Ames, Kenneth M. and Herbert D. G. Maschner
1999 *Peoples of the Northwest Coast: Their Archaeology and Prehistory*. London: Thames & Hudson.
- Black, Glenn A.
1967 *Angel Site: An Archaeological, Historical, and Ethnological Study*. 2 Vols. Indianapolis: Indiana Historical Society.
- Bowne, Eric E.
2013 *Mound Sites of the Ancient South*. Athens, Georgia: University of Georgia Press.
- Coe, Joffre Lanning
1995 *Town Creek Indian Mound: A Native American Legacy*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Cordell, Linda S.
1997 *Archaeology of the Southwest*, 2nd edition. San Diego: Academic Press.
- Cybulski, Jerome S.
1979 *Conventional and Unconventional Burial Positions at Prince Rupert Harbour, British Columbia* (Archaeological Survey of Canada Archive Manuscript, No. 1486). Gatineau, Quebec: Canadian Museum of Civilization.
1993 *A Greenville Burial Ground: Human Remains and Mortuary Elements in British Columbia Coast Prehistory* (Archaeological Survey of Canada Mercury Series Paper 146). Gatineau, Quebec: Canadian Museum of Civilization.
2014a Updating the Warrior Cache: Timing the Evidence for Warfare at Prince Rupert Harbour. In *Violence and Warfare among Hunter-Gatherers*, Mark W. Allen and Terry L. Jones (eds.), pp. 333–350. Walnut Creek, Calif.: Left Coast Press.
2014b Conflict on the Northern Northwest Coast: 2000 Years Plus of Bioarchaeological Evidence. In *The Routledge Handbook of the Bioarchaeology of Human Conflict*, Christopher Knüsel and Martin J. Smith (eds.), pp. 415–451. London and New York: Routledge.
- Emerson, Thomas E., Kristin M. Hedman, Eve A. Hargrave, Dawn E. Cobb and Andrew R. Thompson
2016 Paradigms Lost: Reconfiguring Cahokia's Mound 72 Beaded Burial, *American Antiquity* 81(3): 405–425.
- Fagan, Brian M.
2005 *Ancient North America*, 4th Edition. London: Thames & Hudson.
- Ferguson, R. Brian
1984a Introduction: Studying War. In *Warfare, Culture, and Environment*, R. Brian Ferguson (ed.), pp. 1–81. Orlando, Fl.: Academic Press.
1984b A Reexamination of the Causes of Northwest Coast Warfare. In *Warfare, Culture, and Environment*, R. Brian Ferguson (ed.), pp. 267–328. Orlando, Fl.: Academic Press.
- Fowler, Melvin L., Jerome Rose, Barbara Vander Leest, and Steven R. Ahler
1999 *The Mound 72 Area: Dedicated and Sacred Space in Early Cahokia* (Illinois State Museum Reports of Investigations 54). Spring Field: Illinois State Museum.
- Griffin, James B.
1967 Eastern North American Archaeology: A Summary. *Science* 156 (37772): 175–191.
- Holmes, William Henry
1903 Aboriginal Pottery of the Eastern United States. In *Bureau of American Ethnology, Twentieth Annual Report 1989–1899*, pp. 1–201. Washington, D.C.: Smithsonian Institution.
- Iseminger, William.
2010 *Cahokia Mounds: America's First City*. Cheltenham, South Carolina: The History Press.
- Knight, V. James
1986 The Institutional Organization of Mississippian Religion, *American Antiquity* 51(4): 675–687.
2010 *Mound Excavations at Moundville*. Tuscaloosa, Alabama: University of Alabama Press.
- Kohler, Timothy A., Scott G. Ortman, Katie E. Grundtisch, Carly M. Fitzpatrick and Sarah M. Cole
2014 The Better Angels of Their Nature: Declining Violence through Time among Prehispanic Farmers of the Pueblo Southwest, *American Antiquity* 79(3): 444–464.
- Lambert, Patricia M.
2002 The Archaeology of War: A North American Perspective, *Journal of Archaeological Research* 10(3): 207–241.
- Larson, Lewis H., Jr.
1971 Archaeological Implications of Social Stratification at the Etowah Site, Georgia. In *Approaches to the Social Dimensions of Mortuary Practices*. James A. Brown (ed.), pp. 58–67. Society for American Archaeology Memoir, No. 25. Washington, D.C.: Society for American Archaeology.
- LeBlanc, Steven A.
1999 *Prehistoric Warfare in the American Southwest*. Salt Lake City: University of Utah Press.
- Lekson, Stephen H.
2002 War in the Southwest, War in the World, *American Antiquity* Vol. 67(4): 607–624.
- Malinowski, Bronislaw
1941 An Anthropological Analysis of War, *American Journal of Sociology* Vol. 46(4): 521–550.
- Milner, George R.
1999 Warfare in Prehistoric and Early Historic Eastern North America, *Journal of Archaeological Research* 7(2): 105–151.

- Milner, George R., Eve Anderson and Virginia G. Smith
1991 Warfare in Late Prehistoric West-Central Illinois, *American Antiquity* Vol. 56(4): 581–603.
- Moore, Clarence Bloomfield
1905 Certain Aboriginal Remains of the Black Warrior River, *Journal of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia* 13: 125–244.
1907 Moundville Revisited, *Journal of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia* 13: 337–405.
- Moorehead, Warren K. (ed.)
1932 *Exploration of the Etowah Site in Georgia*. New Haven: Yale University Press.
- Morse, Phyllis A.
1981 *Parkin: The 1978–1979 Archaeological Investigations of A Cross County, Arkansas Site* (Arkansas Archaeological Survey Research Series 13). Fayetteville: Arkansas Archeological Survey.
- Peebles, Christopher S.
1979 *Excavations at Moundville, 1905–1951*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Plog, Stephen
2008 *Ancient Peoples of the American Southwest*, 2nd edition. London: Thames & Hudson.
- Rolingson, Martha Ann
1990 The Toltec Mounds Site: A Ceremonial Center in the Arkansas River Lowland. In *The Mississippian Emergence*, Bruce D. Smith (ed.), pp. 27–49. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
1998 *Toltec Mounds and Plum Bayou Culture: Mound D Excavations* (Arkansas Archaeological Survey Research Series 54). Fayetteville: Arkansas Archaeological Survey.
- Smith, Bruce D.
1978 Variation in Mississippian Settlement Patterns. In *Mississippian Settlement Patterns*, Bruce D. Smith (ed.), pp. 479–503. New York: Academic Press.
- Snead, James E.
2012 Warfare and Conflict in the Late Pre-Columbian Pueblo World. In *The Oxford Handbook of North American Archaeology*, Timothy R. Pauketat (ed.), pp. 620–630. Oxford: Oxford University Press.
- Snead, James E. and Mark W. Allen (eds.)
2010 *Burnt Corn Pueblo: Conflict and Conflagration in the Galisteo Basin, A.D. 1250–1325* (Anthropological Papers of the University of Arizona 74). Tucson: University of Arizona Press.
- Spaulding, Albert C.
1955 Prehistoric Cultural Development in the Eastern United States. In *New Interpretations of Aboriginal American Culture History*. Washington, D.C.: Anthropological Society of Washington.
- Steponaitis, Vincas P.
1983 *Ceramics, Chronology, and Community Patterns*. New York: Academic Press.
- Vencl, Sl.
1984 War and Warfare in Archaeology, *Journal of Anthropological Archaeology* 3(2): 116–132.

Keywords

North America, prehistoric archaeology, Mississippian culture, warfare